

家庭科教育の昭和史とともに生きたる—宮原小治郎小伝

## 第一部 あるジャーナリスト

### の生い立ち (4)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

#### 『婦女新聞』への寄稿

小治郎が勤務した上田高女は、地元の上田女子尋常高等小学校の上級学年と補習科の児童を高女本科生に、また裁縫専修科の児童を高女技芸専修科生にそれぞれ編入して発足したので、発足当初から全学年の生徒がそろっていた。転任と同時に授業を持つ傍ら書記の仕事もし、かつ、体操科免許取得のための勉強もしなければならなかった小治郎の生活は多忙を極めた。

一九〇二(明治三十五)年九月十五日発行の『婦女新聞』第一二三号に、「寄宿舎の朝」と題した左のような短文が載った。筆者は「信濃上田町 みやこ女史」とある。みやこは、宮原のみやと小治郎のこをとったものと言われ、小治郎がそ

の後長く愛用したペンネームである。高女教師という新生活もようやく軌道に乗り、気分的にも余裕ができたのであろう。起床の鐘にあたら夢を破らるれば 友ははや枕頭に立ちて 支度には忙はしく 群雀うらの竹むらにさわぎてすぎ行く朝 風いと静なり。

廊下の右には あづま菊つゆ草朝顔など咲ほこりて 青く 赤く白く おのがじし自然の色をたゝかはするなど心地よ きながめなるかな。

楊枝くはえて二階より見おろし居る友の如何にめでたき歌をばよみたりけん。(以下略)

これが、今日知られる小治郎の手になる最初の文章である。続いて同紙第一二四号に、「寄宿舎の夕」と題した前号同様の美文調の短文が載った。最初のころの文章には、右の引用に見られるように、文法的に整っていないところも見られる。独学の弱点だったのであろうか。しかし、長く続く同紙への寄稿の中で、文章もしだいに洗練されてくる。高等女学校の教師だったとはいえ体操科担任の小治郎が『婦女新聞』へ寄稿するのは奇異な感がある。このことを自覚していたからこそ、「みやこ」というペンネームを用いたのであろう。「みやこ」の寄稿は、この後、一九二七年まで続く。

『婦女新聞』の主幹福島四郎の前半生

『婦女新聞』は、一九〇〇(明治三十三)年五月十日に二

十六歳の福島四郎により創刊された週刊新聞で、一九四二（昭和十七）年まで四十二年間存続した。この間の編集発行人は一貫して福島四郎であった。

福島四郎の経歴は、補和県立浦和高等学校に遺された彼の自筆履歴書等によると、以下のごとくである。

一八七四（明治七）年二月二十八日、兵庫県加東郡小野村ノ内小野町に、土族福島元嘉、てるの四男として生まれた。

七九（明治十二）年四月に加東郡小野小学校に入学、同校小学中等科を卒業。その後、八五（明治十八）年七月から八八（明治二十一）年二月まで小野町の進藤良生の家塾において、さらに同年三月より翌八九年三月末まで、兵庫県神東郡西田原村の松岡操（号は約齊）の家塾において漢学を修業した。この松岡約齊は、のちの民俗学者柳田国男の父である。

この間、八八（明治二十一）年八月に試験検定で小学校校業生の免許状を取得、同年十一月から兵庫県神西郡甘地尋常小学校の授業生となった。十四歳で授業生となり、小学校教員として職業生活を始めたことなどは、宮原小治郎と共通している。この学校には九三（明治二十六）年四月まで勤めた。この間、九二年十二月には試験検定により、兵庫県小学校准教員免許状を取得し、九三年十月から翌九四年十月まで、兵庫県美婁郡三樹尋常高等小学校の准訓導として勤務した。

九四（明治二十七）年に上京、同年十二月より神田区錦町

の国民英学会に入学、正科第一級前期を修業した。次いで翌九五年四月より神田区猿楽町の国語伝習所に入学、その普通科および高等科を卒業した。九六（明治二十九）年六月には試験検定により、東京府小学校教員免許状を取得している。

二十二歳となった九六年六月二十日より、牛込区東横町の大和田建樹の書生となり、「国文学研究の傍著述補助」に従事した。大和田が信州の宮原小治郎宅に立ち寄った時期の少し前に、福島も大和田に近づいたわけである。この年九月に福島は東京専門学校（後の早稲田大学）英語学部に入學、第二年級まで修業した。

九七（明治三十）年二月二十九日から九九年四月十日まで、本所区尋常高等小学校の訓導となった。東京専門学校を中退した理由は分からない。しかし、九八（明治三十一）年五月に試験検定により師範学校尋常中学校高等女学校国語科の教員免許状を取得したところを見ると、英語科でなく国語科に専心するつもりになったのかもしれない。

九九（明治三十二）年四月十四日に、埼玉県第一中学校助教諭となった。時に福島は、二十五歳であった。埼玉県の公立中学校設置は遅く、第一、第二尋常中学校の設置認可は九五（明治二十八）年六月、開校したのは翌九六年十月であり、九九年にはまだ卒業生を出していなかった（埼玉県立浦和高等学校『銀杏樹八〇周年誌』）。小学校教員をしながら中等教員

の免許を取得、その資格で新設早々の中学校に赴任したという経歴も、宮原小治郎のそれと似ていた。福島が小治郎より若くして中学校教員となったのは、系統だった教育を受ける機会に小治郎よりも恵まれたからと言えよう。

#### 『週刊婦女新聞』創刊の背景

しかし福島は、埼玉一中に一年足らずしか在職せず、一九〇〇（明治三十三年）一月二十日に依願退職した（同校が埼玉県立浦和中学校と改称したのは翌年八月である）。突然の退職は、新聞発行の企図を実現するためであった。

『婦女新聞』は巖本善治の『女学雑誌』に勝るとも劣らない文化的功績を持っている」と言われる（村上信彦『朝日ジャーナル』一九八二年四月二日）。一九八〇年代に入って、与謝野晶子らと並ぶ『明星』の女性歌人・石上露子が『婦女新聞』に多数寄稿していたこと、その中に日露戦争に対する厭戦の歌や小説が含まれていること、それは与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」（『明星』一九〇四年九月号）や大塚楠緒子の「お百度詣」（『太陽』一九〇五年一月）にむしろ先んじていたことが注目されている（大谷渡『菅野スガと石上露子』一九八九年、東方出版）。こうしたことから、『婦女新聞』への関心も生まれつつあると言える。しかしごく最近までは、『婦女新聞』やその主幹福島四郎に関する研究は、ほとんどなかったに等しく、同新聞の全号が不二出版から復

刻されるに及んでようやく注目されるようになった。（総合女性史研究会近代史部会会報第一号『『婦女新聞』を読む』一九八四年十二月、三井須美子「八婦女新聞」と福沢諭吉の婦人論」『都留文科大学研究紀要』第三〇集、一九八九年、野村美枝子「福島四郎と八婦女新聞」一九八九年度 放送大文学卒業論文、など）。

世紀の転換期における高等女学校拡充政策の登場は、宮原小治郎を新しい世界に導き入れる契機となった。実際、世紀転換期は、たんに暦の上での転換期であったにとどまらず、近代日本の、したがって近代日本の女性史や女子教育史の一つの大きな転換期であった。

日本は、日清戦争の賠償金を基に一八九七（明治三十）年に金本位制を採用し、貨幣制度の面で近代国家の仲間入りをした。九〇年代には急速に産業革命期に入り、九七～九八年の中間恐慌を経て、早くも一九〇〇（明治三十三年）～一〇一（同三十四）年には本格的な資本主義恐慌を経験した。これは、日本経済が産業資本主義の段階に入ったことの証であった（長岡新吉『産業革命』）。この少し前、九八（明治三十一年）年には民法の親族編、相続編が公布、施行され、戸主権、長子家督相続制、妻の法律上の無能力等、一言にして言えば家の法制度が整備された。こうした時期に中学校令改正、実業学校令、高等女学校令の制定（九九年）、私立学校令の制定、小

学校令改正（一九〇〇）、専門学校令の制定（〇三年）等の一連の法令によって近代的な学校制度が整備された。その中で、高等女学校令制定に見られるように、家制度に見合う良妻賢母主義を標榜し、男子とは進学系統を異にする女子教育の体系もまた整頓されたわけである。こうした動きに即応して各地で公私立の高等女学校の設立が相次いだ。小治郎が就職した上田高女もその一つであった。

他方、女子教育の世界に、新しい動きも芽生え始めた。津田梅子の女子英学塾（津田塾大学の前身、一九〇〇年七月）、吉岡弥生の東京女医学校（東京女子医科大学の前身、同年十二月）、横井玉子、斎藤志津の女子美術学校（女子美術大学の前身、一九〇一年四月）、成瀬仁蔵の日本女子大学校（日本女子大学の前身、同上）等の開校がそれである。女子教育を家制度、良妻賢母主義のもとに置こうとする大勢に抗して、女子の能力を開花させようという動きが始まったのである。

福島四郎が女性向けの新聞発刊を企図した直接の契機は、九九年四月から『時事新報』に連載された福沢諭吉の「女大評論、新女大学」が婦人のいわゆる三従を否定し、女子もまた独立の人格者たるべきを説くを読み、これに触発されたことであった。また福島は、後年、姉の不幸な結婚に感ずるところあって、女性の地位向上を目指す「婦女新聞」を創刊し、発行し続けたとも語っている。実際、同紙の長い歴史の

中に、女性の地位向上を目指したとする福島の意気込みを読み取ることは容易である。しかし、直接の契機はそうであったにせよ、長年月の間には、論旨に揺れもあり、その歴史的位位置づけについてはなお研究の余地が残されている。

#### 宮原小治郎と『婦女新聞』

『婦女新聞』創刊号が掲げた一二か条の「婦女新聞の目的」の第一には、「女子教育上の大方針、今日も尚一定せざるが如く」なので、「本紙はまず之を研究せんとす」とある。はじめから福島的女子教育論を前面に打ち出していたわけではなかった。この一二か条の方針の一つに「歌文、音楽、生花、點茶、書画等、すべて高尚なるもの優美なるものは之を奨励せんとす」とある。創刊当初から『婦女新聞』の歌文の欄を担当、指導したのは、福島の師であった大和田建樹である。『婦女新聞』創刊と同じ五月に大阪三木書店から発売された『鉄道唱歌』（汽笛一声新橋を……）が大和田の名を高からしめたのは偶然であったにせよ、福島の『婦女新聞』には幸いしたように思われる。この大和田との縁で、小治郎は創刊の当初から『婦女新聞』の読者となったと思われる。「婦女新聞」への小治郎の寄稿は、女子教育論への共感を基礎としたというより、むしろ「高尚」「優美なる」「歌文」によって紙面を飾ろうという構想への共感を基礎としていたと思われる。少なくともはじめのころはそうだった。